

論文内容の要旨

平野 蘭子

論文題目

看護学実習カンファレンスに参加する看護大学生の体験：
ともに育つグループの醸成に向けて
Lived Experiences of Nursing Students Participating in Clinical Conferences during Practicum:
Toward Creating Groups Growing Together

I. 研究の動機と背景

急速な社会情勢の変化に伴い、看護学士課程教育においては近年、チーム医療や専門職連携教育が重視され、複数他者のなかでの人間関係形成や、メンバーシップの発揮ができる力を身につけることが課題となり、複数他者との相互交流のなかでの対話的で主体的な学びが重視されている。看護学実習において学生は、臨床現場に少人数の学生グループで入り、対象者への看護実践を通して学び、実践を振り返る方法の1つとして実習カンファレンスが行われている。学生は臨地のその場で、実践の場面から話し合いの場面へと切り替える必要があり、対象者に必要な看護を時間内にグループメンバーや教員、実習指導者とともに考えていくという状況で学習していく。このような複雑な状況下で複数他者と交流しながら学び合う体験は、学生の将来の医療チームでのメンバーシップの基礎固めや職業的アイデンティティの形成においても重要である。さらに学生は、他者との摩擦や対立を避ける傾向にあり、グループ討議に不安や困難を抱えており、学生個人の体験を十分に理解した上で教育支援を検討することが重要となる。しかし、実習カンファレンスの状況が学生にどのように体験されているのかについては、十分に明らかにされていない。

II. 研究目的

看護学生は実習カンファレンスに参加し、その状況をどのように体験しているのか、特にこれまでのグループでの学習体験とのつながりから明らかにし、その体験にどのような意味があるのかを見出す。

III. 研究方法

質的記述的研究デザインを用いた。研究参加者の条件は、対面での実習カンファレンスおよび病棟で受け持ち患者への看護実践を予定している成人看護学実習を履修している者

で、年齢が 25 歳以下の 3 ～ 4 年次の看護大学生とした。募集は研究者のネットワークを用いて、関東圏・関東近郊の 4 看護系大学に協力依頼し、成人看護学実習の科目責任者の協力を得て、1 つのクールにつき 1 ～ 2 の実習グループの学生全員（計 24 名）に参加依頼をした。データ収集は、1 人の参加者に対し非構造化インタビューを 2 ～ 3 回行った。データ収集期間は 2021 年 6 月～2023 年 3 月であった。データ分析は van Manen（1997/2011）の解釈学的現象学的方法に基づいて行った。インタビューデータを逐語録におこして繰り返し読み込み、全体と部分を把握し、体験の語られ方や文脈の成り立ちを手がかりに、参加者の個人的な体験を記述した。記述全体から「実習カンファレンスに参加する」重要な意味を示す内容を抜き出し、参加者に共通する意味の特徴を表す《テーマ》とそのテーマを構成する【意味の側面】を検討し、《テーマ》ごとに学生の体験を記述した。本研究は、日本赤十字看護大学の研究倫理審査委員会の承認（2020-073, 2022-030）を受け実施した。

IV. 結果

研究参加者は、協力の得られた 2 看護系大学の成人看護学実習を履修する 3 ～ 4 年次の看護大学生 9 名であった。参加者の語りから、以下の 3 つの《テーマ》が見い出された。

1. 《自分に向けられる期待を押し量る》: このテーマは【視線やしぐさから期待を先取りする】【求められる答えから外れないようにする】【自分の不足の自覚から指導者への申し訳ない気持ちを抱く】の 3 つの意味の側面から成り立っていた。学生は実習カンファレンスに参加する際、教員や指導者から向けられた期待や求められていることを、その視線や態度などから敏感に先取りして、カンファレンスでの教員たちの言葉の真意を読み取っており、自身の言動を模索しながらもそれらの期待に沿うことが暗黙の前提となっていた。また、学生は自分の知識や経験の不足を自覚し、教員や指導者の見方を間違いないものとして優先してとり入れようとしていた。学生が汲みとった期待は、カンファレンスでの自身の言動の方向性を決めうる 1 つの指針となっており、学生が教員や指導者から求められていることがわからないと方向性を見失い不安定になるという脆さも併せ持っていた。そして指導側の期待に応えられないと感じた場合には「申し訳ない」と、自身の力不足に後ろめたい気持ちが生じていた。この背景には、学習者や指導者側の両者に、学習者は成長しなければならない、学びを得なければならない存在であるという共通の前提があった。

2. 《グループ独自の秩序を形成する》: このテーマは【事前の段取りで本番の話し合いを先取りする】【自分の発言を受けとる相手に気遣う】【グループメンバーと自分を位置づける】【発言ルールを守り円滑な運営につなげる】【一瞬で緊張する場の空気感をつかむ】の

5つの意味の側面から成り立っていた。学生は実習カンファレンスに参加する際、教員や指導者などを含むその場に参加するメンバーの特性や状況に応じて、グループ独自のルールを形成していた。これらのルールは、学生個人が過去に体験した出来事で、特にネガティブな感情を抱いた体験を省察し、自分はこうしようとメンバーに気遣い、カンファレンス中の発言や振る舞いに関する独自の規律やルールを設けて意図的に振舞うことで、それらが徐々にメンバーにも伝わり、日々のカンファレンスの状況で更新されながらそのグループに定着していた。学生はメンバーを理解しつつ、グループ全体との関連を考えて自分のふさわしい位置を定めており、自分がとることのできる役割を引き受けるなど、メンバーとの関係性のなかで自身の身の振る舞い方を決めていた。カンファレンスは決められた時間内に、即時にその場で意見交換をしながら展開するため、学生は不測の事態に陥らないようにメンバー間で事前に発言の順番や内容などを決めて段取りをし、カンファレンスの場では互いに関係性を壊さないように自身の言動に慎重になり、互いの感情を共通の基盤とした安定した雰囲気を持続しようとしていた。学生はその場の空間に流れ込むメンバーや自身の焦りや戸惑い、緊張感などの感情を敏感に察知しており、場の秩序や調和が乱れる事態が生じた場合は沈黙してやり過ごすなど、その場の雰囲気に留まる状況があった。

3. 《グループ全体でもっといい看護を目指す》：このテーマは【安心して意見を言える関係性が深まる】【メンバーの語りを介して自分の体験と向き合う】【グループ全体で成長しようとする】の3つの意味の側面から成り立っていた。学生は、グループメンバーとともに実習カンファレンスに参加していくなかで、メンバーの考え方、意見の言い方や聴き方など、日々メンバー間で相互に理解を深め、カンファレンスの場が教員や指導者も含めて否定されない雰囲気であることを察知すると、安心して意見を言うことができていた。学生は自身の発言内容の不足をメンバーに補ってもらい、メンバーの発言から新たな発想を得てさらにその場で意見を言うなど、互いに補い助け合う関係を形成していた。そのなかで、学生は個人の視点からグループという小集団の一員としての視点を得ていき、ともに学ぶ者―「私たち」―として連帯する感覚をつかんでいた。学生はメンバーの体験を聴き、その考えに触れることで自分の状況や考え方に気がつき思考を深め、メンバーも同様に自分の意見から思考を深めていることを互いに感じとりつつ、切磋琢磨し合いながらよりよい看護を目指し互いに成長していくことを志向していた。

V. 考察

1. 傷つきやすさと気遣いから形成されるグループの規範：相手を傷つけてはいけないと

気遣う学生の行為は、自分の傷つきやすさへの応答でもあり、学生個人の気遣いから生まれた言い方の規律は、やがてグループの規範となっていた。これは学生がメンバー間の関係性を安定させ、カンファレンスの場を安全に維持していくための営みであった。学生は発言ルールには形式的に従うが、グループ内の関係性維持を優先して自分の意見を敢えて言わないなどの、暫定的で調節的なやり方で応じる特徴があり、学生が模索しながらもその場の状況に応じた周囲との連帯性や責任性への配慮やメンバーとの共生ができるようになることが示されていた。一方で、学生が自身の意見を表出して深めるという機会を失い、学生個人の内的な学習への満足や意欲がなおざりになる可能性がある。

2. カンファレンス営為における暗黙の前提：学生は自立・自律と教員・指導者の期待やルールに従うなどの相対することが同時に求められ、さらに他者の視点と比較して幅広く思考する一方で、教員の見方や考えを疑わないという両義性があった。教員や実習指導者の身体や言葉を介して汲みとられた期待や意図は、暗黙のうちに学生のカンファレンス営為そのものに備わっており、教員や指導者に許可・許容されているという前提があった。

3. 看護を学び合う共同体の形成：安心して意見を言える関係性が、グループ全体でよりよい看護を目指し成長を志向する前提となっており、グループで学び合うには学生個々の心理的な安全性を担保することが重要である。学生の知識や経験の不足の自覚から生じる申し訳ない気持ちは、学生の成長を志向する契機となっており、患者への看護や自分の属するグループに対する倫理観や道徳観の基礎の形成につながると考える。

4. 学生の思考力の基盤となる省察的な対話に向けて：学生のとらえる主体的には期待される学生像が重ねられており、教員が期待しすぎると学生は過剰にその期待を汲みとり、暗黙に表向きの関心・意欲・態度を見せる可能性がある。自身を省みる省察的な対話が展開されるカンファレンスは、看護実践に必要な思考力を習得するうえで重要であり、看護基礎教育において目指される。そこにはグループの関係性が安定し、教員や指導者の参加する場の雰囲気を受容的である、学生個人が自立・自律して学んでいる、グループの方向性がメンバー間で共有されているなどの条件が整うことが重要であると考察された。

Ⅵ. 看護学実習における教育実践への示唆

学生が実習カンファレンスに参加することは、看護専門職に不可欠な協働や連携の基盤となる他者と連帯しながら学ぶ教育的な契機である。教員は、グループでの学び方にも注目しつつ自らの実践を省察し、指導者と協働して学生が安心して意見を言えるような場の安全を保障し、学生が他者と学ぶ手ごたえを早期につかめるように支援する必要がある。